

春燈



September 2009

9

主宰の句

安立公彦

うちけむる雨意のむらさき花菖蒲

夏料理暮れゆく海をともに見て

敦忌の青空映すにはたづみ

千の鳥容れて万緑うごくなし

はや晩夏一篇の詩を唱さばや



燈下集



○ 長谷川歌子

モデル・ルーム幸せさうに霞草
病む人と時わかち合ふ半夏雨
大噴水止まり此の世の音戻る
バス停へいつも小走り朝曇
露草の瑠璃に集まる生命かな

○ 佐々木良玄

水蓮や波はしづかに岸に着く
小判草海に向ひて墓一基
継ぎあてて着て妻老ゆる京鹿子
なにもかもさつきのままなり午睡醒め
ラムネ飲む思ひ出はなほ過去進行形

○ 金山雅江

見はるかす大海原の白雨かな
四次元に迷ひこみしか梅雨の蝶
青一色のゴッホの「アザミ」初夏の風
海底都市の王妃の像や雲の峰 (海のエジプト展二句)
海底より目覚めしファラオ銀河みる

○ 白神知恵子

めぐり来る忌日心得棟咲く
紫蘇に指染めて一日を母のこと
生産者の笑顔のラベルさくらんぼ
太竹のざつくばらんと皮を脱ぐ
弱腰に終る正論ところてん

○ 伊 東 湘 三

追憶のなかのひと恋ふ梅雨の闇

立哨のふと仰ぎ見し梅雨の月

凌霄花やうやくできし逆上り

微笑みてうなづくばかり生身魂

靖国や変らぬものに蟬しぐれ

○ 太 田 佳 代 子

制服のブラウス真白額の花

三歳の肩幅ゆかし夏ごろも

木下闇いくつも抜けて子が来るよ

小さき手で摘みし青紫蘇香りたつ

住み慣るるまでの月日や栗の花

○ 荻 野 嘉 代 子

夏めくや藍のかちたる江戸小紋

緑陰や阿修羅に会ひし幸抱き

目交ひに真顔酔顔父の日来

青豌豆冷しスープの色と味

鷗外忌膝なだめつつ無縁坂

○ 久 保 久 子

身の内の子ばむ杜や梅雨深し

雨傘のかたまつてゐる花菖蒲

花がら摘むしとどの雨の菖蒲守

秘め事は持つべし蛭しづみけり

光源氏に添ひ寝の夢や竹夫人

○ 廖 運 藩

下駄履き機虹を目指して飛び立てり

かの頃は赤紙もありき落し文

夏草や先人抗匪の石隆門

初蟬や芝山巖頭六師塚

布袋様の躰出しルック蟬しぐれ

○ 中 村 春 宵 子

青蘆や渡良瀬沿ひの遊水地

ひと雨に映ゆる池畔や燕子花

雨兆す白一色の四葩かな

夏至の夜やランプで過ごすエコ家族

あでやかや休耕田の大賀蓮

○ 渡邊 泰子

蛍の透けて灯りし尼僧の衣

読みとらぬ自動改札走梅雨

出番待つ子は子等の陣町御輿

青春のはじける泡やソーダ水

子はいつか親の先ゆく蟻の列

○ 生方 義紹

泣面の昭和羅漢や著莪の花

誕生日のこめしの膳のならひかな

海陸^{ミカ}と唱へし習字若葉風

捨舟を蹴る青鷺のゆくへかな

薫風や雀のねらふ給餌台

○ 久米 憲子

笑む埴輪踊る埴輪や麦の秋

寝姿の古墳彩る姫女苑

六月の木洩れ日降らす鳥の声

糸蜻蛉生くる証の水たたく

蚊帳吊草心の贅の幼き日

○ 岩井 泉樹

わけもなくひと日を騒ぎ梅雨鴉

印相の仏の指や青あらし

万緑や仏には無き土踏まず

水中花咲き草臥れてしまひけり

句点まだ打てぬ戦後や沖縄忌

○ 小倉 陶女

走馬灯回りはじめのぎこちなし

蛍火や女の肌のうす湿り

紙魚走る「日本女子修身訓」

香水も指輪も遠き月日かな

蛍火や行方知れずになるもよし

○ 荒井 慈

煙突の見ゆる坂道麦の秋

昼顔や祖母の写真のパーマネット

新発意の初恋の人山桜桃

少年の渾名カッパや胡瓜食む

時の日や開けてしまひし玉手箱

○ 佐渡谷 秀一

浅草や涼しく並ぶ人力車
電氣ブラン持つ手老いたる祭かな
涌水の流るるひかり夏落葉
父の日やをとこの料理当てにさる
明易し短き夢のうつつとも

○ 横田 初美

夕星や蜘蛛は高きへ糸紡ぐ
山内不幸地にただようて梅雨の蝶
下校の児夕立の矢を抜けたる
病める子に向日葵の花まぶしすぐ
海の日や訪ねてみたき竜の宮

○ 沼田 桂子

荒梅雨の地にふかぶかと降り注ぐ
梅雨曇鴉のさがす消えし森
ほととぎす聞いて欲しいと幾度も
青嵐波立つてゐる木とわたし
ワイルドな生き方がよし大南風

○ 秋場 貞枝

母衣纏ふ敦盛草の勇姿かな
菖蒲田の雨はむらさき十二橋
羅の風に逆らふ香なりけり
陶片の伊万里を語る夏の月
頼政の無念瞬く宇治蜜

○ 宮田 豊子

荒梅雨や部屋をはみ出す「三国志」
白髯の古書肆のあるじ青簾
棕櫚の花絵描き蕪村の目の在り処
夏衿に替へ新たなる風と逢ふ
武蔵野に分水嶺あり薄雪草

○ 佐々木 新

嵯峨野路の風の序破急竹落葉
花あやめ花嫁乗せて手漕ぎ舟
時の鐘かすめて迅し夏つばめ
父の日や父の手巻きの腕時計
産土の杜やせにけり額の花

当 月 集

安立 公彦選



○ 篠原幸子

青々とただよしきりの声ばかり

曇る日は白のまされり花菖蒲

小さきものせて息づく未草

泰山木花の在り処は風に聞く

大皿にあぢさゐ浮かべ陶器店

○ 海村禮子

水無月の芒持つ草の茂りかな

木漏日の中のひとつ泉指す

名の知らぬ花の彩る夏の山

夏服に吹きくる風つつましく

串の鮎泳げるさまに焼かれけり

○ 渡辺若菜

咲き分けの朝顔の鉢大家族

夏木立置いてけぼりの三輪車

蛸狩左右につなぐ小さき手

芳香剤一滴梅雨を楽しめり

父の忌や出羽三山に夏の月

○ 清水美子

祭神の遺愛江戸種の花菖蒲

花殻を摘む園丁や梅雨ふかし

老鷲や谷戸より見ゆる海の風

星涼し墨跡しるき高野切

夫の旅切り火で送る単衣かな

○ 神田恵琳

花合歡の風や危ふき彩をもち

荒畑に母の影置く帰省かな

古井戸の竹蓋反れる小暑かな

海芋咲き河童忌近くなりけり

玫瑰やタンゴの茶房去り難き

春燈の句

安立 公彦選

赤城山遠見に利根の夏霧らふ

埼玉 金子 和子

大利根の川灯台や梅雨兆す

梅は実はまだ山積みの遺稿集
夫の席空けて一年籐寝椅子

茫茫と坂東太郎走り梅雨

夏草や鉄柵越しの異人墓

霞切や風立ちやすき利根河原

万緑やマリア像より鳩の発ち

夏帯を小さく結び八十路なる

卯波立つベイブリッジは沖へ伸び

柿若葉歯もて切る糸小さく鳴り

櫻桃子・真砂女に逢はで甚平着る

行々子聞きとめしより雨しきり

田の隅の訪ねて小さき菖蒲園

ハングライダー茅花流しの勢得て

抱かるるために木に乗る夏の子等

隠れ家は額の裏なり守宮鳴く

人の罪裁くわが罪梅雨深し

刻銘に敵味方なし沖縄忌

月見草明日を拡ぐる海のあり

島巡る青の一文字梅雨明るる

時の日をいつものやうに時の過ぎ

夏帯や音楽会の木の座席

実桜や薄日まばゆき運河沿ひ

酒中花や酸欠気味の男部屋

父の忌の近し空より蜘蛛の糸

葛餅や亡き夫いつも夢の中

梅雨の夜の筆鋒ゆるびなかりけり

東京 坂入 妙香

沖縄 辻 泰子

東京 那須 礼子

東京 佐藤 博重

神奈川 葦原 霞切

千葉 西岡 啓子



余言

安立公彦

茅の輪くぐるときの口紅濃きままに

菊地 螢子

「茅の輪」は夏越の大事な命なみそぎである。へ茅の輪くぐりて今年も守れる命かな かな女である。その茅の輪も今では観光の一助となっている。いつか二荒山神社で、数人の外人の観光客が、神妙に列を正してくぐるのを見た。今、作者はその茅の輪を、口紅の濃きままくぐったと言う。「口紅濃きままに」に、違った形の神妙さが感じられる。まさに現代の茅の輪くぐりの景だ。

下駄履き機虹を目指して飛び立てり

廖 運藩

航空機には、滑走路を使って離着陸する機と、水上を使う水上飛行機がある。さらに水上飛行機には、機体が水に浮く構造となっている飛行艇と、フロートと呼ばれる浮舟

を機の脚部に取りつけたものがある。これが下駄履き機だ。と、こういうことは、私たちの年代の者なら誰しも知るところだ。しかしその水上飛行機を句の対象とした作者が台北の俳人であるところに驚きがある。

下駄履き機は入江を使って飛び立つことも出来る。いま潮の香を引くように、一機の水上機が飛び立った。折しも空にはくつきりと虹が立っている。

作者は若い頃、旧日本軍の飛行艇を見た経験があるのかも知れない。とするとこの句には深い思いが裏付けされている。それは同時発表の、へかの頃は赤紙もあり落し文の句を見ても頷ける。

台北の皆さんは、俳句というこの伝統ある文芸を、正しく見透しながら句作に当たっている。立派なことと思う。付記すると、水上飛行機というものは余りスマートな姿ではない。その下駄履き機が虹を目指して飛び立ったという景は滑稽味を誘う。まさに俳諧の世界である。

青々とただよしきりの声ばかり

篠原 幸子

この「よしきり」は「葭切」。また「行々子」とも。へ能なしの寝むたし我をぎやうぎやうし 芭蕉。夏、青蘆の茂みに巣を作る。

作者はいま一面の青蘆原の前に、葭切の声に聞き入っている。情景のみを述べ、余分な言葉は一切付けていない。

しかし句を見る私たちは、その情景描写の中に、青蘆と葭切の響き合いを感じとる。「青々と」が、その感じをよく引き出している。

水無月の芒持つ草の茂りかな 海村 禮子

この「芒（のぎ）」は、イネ科の植物の花の外殻にある針のような突起を指す。しかし「芒」には「すすき」の読みもある。むしろ「すすき」の読みが現在では一般化している。それを作者は「芒持つ草」とし、「水無月」の季語を配した。表現としては正解だ。季節に合った野草の群生をみごとに描写した句である。

咲き分けの朝顔の鉢大家族 渡辺 若菜

「大家族」とは何人家族か。むかしと今ではその基準も異なる。私の家も六人兄弟。八人家族がとり分け大家族とは思わなかった。この句、「咲き分けの朝顔の鉢」がいい。大家族ながら愉しく暮らす一家の表情が見えてくる。

星涼し墨跡しるき高野切 清水 美子

「高野切」は「こうやぎれ」と読む。「古筆切（こひつぎれ）」の一。紀貫之筆と伝えられる古今集の断片」と辞書にある。こういう由緒ある対象を句にするときは、一句の内容がよほど緊密でないと、対象とするものが浮いてしまう。

この「星涼し墨跡しるき」はそれをみごとにクリアしている。

刻銘に敵味方なし沖縄忌 辻 泰子

この稿を書いている今は七月。八月が来ると「原爆忌」、さらに「終戦記念日（歳時記の主季語による）」が来る。これらは「孟蘭盆会」とともに、新涼を迎える前の、人として忘れることの出来ない祈りの日である。

しかし沖縄の人にとっては、それらの行事以上に、忘れられない日がある。「沖縄忌」だ。これはむしろ「沖縄の人」という粹を外すべきだろう。昭和二十年四月、米軍の沖縄本島上陸に抗する激戦の果て、六月二十三日、三万人の日本軍は全滅。住民十数万人が死亡した。その日を沖縄忌とし、戦没者の慰霊祭が執り行われている。

「刻銘」は摩文仁（まぶに）の丘に立つ平和の礎（いしじ）に刻まれた死者の名。立ち並ぶ銘板の数はどれほどあるのか。そこに刻まれた死者は日本のみではない。国籍を問わず、全戦死者二十三人余と言われている。作者はその刻銘の前に「敵味方なし」と詠む。尊い言葉である。

現在市販の歳時記には、「沖縄忌」の季語はない。（『沖縄俳句歳時記』には収録されている）。しかしこの季語が市販の歳時記に載るのも遠い先ではなからう。